

インド古代初期におけるヤクシャの神像彫刻について

A Study on Yakṣas Statues of Early Indian Art

永田 郁 (NAGATA Kaoru)¹⁾

1) 名古屋大学大学院博士後期課程修了

Completion of doctoral course of Aesthetics and Art History, Graduate School of Letters, Nagoya University

Abstract

Yakṣas are the Lords of Life, who were gods of ancient India folk cult like Nāgas and Yakṣīs, were originally spiritual beings that dwelled in sacred trees, and have inexhaustible power of life activity. On the other hand, Yakṣas have another aspect of awesomeness, awing ancient people. That is to say, Yakṣas have ambivalent aspects: both benevolence and malevolence. Thus by their nature of ambivalence, Yakṣas have been worshipped by ancient people with desiring for various wishes. Many Yakṣas statues had been established as Bhagavat Images (Icon).

This paper deal with Yakṣas figures carved in the round from 1st B.C. to 1st A.D., which were discovered at Mathurā, Vidishā, Patnā, and Pawāyā etc. This paper consists of three parts. The first chapter will review some Yakṣas statues so far discussed, stylistically and iconographically. The second chapter deal with two figures recently discovered at Mathurā to bring their iconographic features to light. The third chapter will deal with the inscription of Yakṣa statue, especially Pawāyā image to make clear the aspects of Yakṣa cult in ancient India. With above studies, we will bring essential aspects of Yakṣa Images before Buddhist art into bold relief.

はじめに

古代インドの民間信仰の神々であるヤクシャは元来聖樹を依り代とする精霊であり、無尽蔵な生命力を有する豊饒・多産を司る神である。一方、この神は荒ぶる神の側面をも持ち、人々に畏れられる存在でもあった。この二面性のあるヤクシャの性格は古代インドの人々の祈願の対象となり、前者の性格は豊饒・多産や子宝を成就し、また後者の性格はその力により共同体の安寧を成就する。このヤクシャは仏教興隆以前より厚く信仰され、神像彫刻として造形化されていた。

ヤクシャの聖廟 (bhavanam) はチャイティヤ (caitya) と呼ばれる聖樹であったり、聖樹の下の石の台座 (アーヤタナ āyatana, veyaddi, mañco) であり、人々はこのヤクシャが棲む聖樹や石の台座に対し、種々の供養 (プージャー pūjā) を行った。このようにヤクシャの聖廟は本質的には、聖樹の下に置かれた石の台座で構成されることが文献から窺える⁽¹⁾。この聖樹と台座の組み合わせは初期仏教美術において菩提樹下の台座で仏陀の成道を表す場面にも転用されている⁽²⁾。ただ、上記の聖樹下の台座がヤクシャの聖廟の基本であるが、叙事詩にはヤクシャの聖廟が構築物 (寺院) であると記述され、その中には彫像もあったようである (Coomaraswamy, 1965)。ヤクシャの聖廟が構築物 (寺院) であったことは考古学的な遺構がないため、文献資料からしか窺えない。ただ彫像については仏教興隆以前およびそれ以後の作例が東インド・中インドにおいて丸彫の彫像で幾つか発見され、その中には銘文を伴うものもあり、その信仰の程が窺い知れる。

これらの丸彫神像のヤクシャ像の中には神名を刻する作例も含まれることから、いずれも崇拝の対

象であったことは相違なく、インド美術史において現存最古の神像彫刻となる。現存するヤクシャの丸彫神像の作例は東インド（パトナーなど）、北インドのマトゥラー、中インドのヴィディシャー（ベラスナガル）などに分布する。従来これらの丸彫神像（ヤクシー像を含め）はマウリヤ時代に遡る制作年代と考えられていたが⁽³⁾、高田修氏はこれらマウリヤ時代に遡る作例の再検討を行い（高田、1969）、近年の研究ではその制作年代をマウリヤ時代より下げる傾向にある（肥塚・宮治、2000）。本稿では上記の先行研究を踏まえ、これまで議論されてきた丸彫神像の作例⁽⁴⁾を紹介し、また近年発見されたヤクシャの丸彫神像も含めこれまで議論に漏れていた作例を加え、古代初期のヤクシャの丸彫神像の有り様を明確にし、また銘文にみられるヤクシャの神名である「マニバドラ・ヤクシャ」について文献資料を中心にその信仰を様相を探る。以上の考察により、仏教美術に受容される以前のヤクシャの造形の様相を浮き彫りにする。

古代初期の神像彫刻の作例

古代初期美術においてヤクシャの丸彫神像の現存作例は筆者が知る限り、確実にヤクシャと同定され得る像例が9乃至10例確認できる。本稿ではその代表的な作例7例について取り上げ、考察してみたい。それではまず、従来議論されてきた代表的な5例についてみてみたい。

(1) パールカム出土 ヤクシャ立像（マトゥラー博物館 [no. C1.] 図1）

この像はマトゥラー市の南方22.5キロにあるパールカムという村で祀られた像で、砂岩製で高さは台座を含め2.64 mの巨像である（図1、正面/背面）。本像の台座には上面、両足の間とその外側とにまたがり、古ブラフミー文字の銘が刻まれている（図2）。銘文は次の通りである。

【銘文 I】（cf. Lüders 1961）

1. (Mā)nibhadapuge[h]i kā(r)i(t)ā (bha)ga[va]to (patimā)
2. aṭha(h)i [bhātu]hi
3. kuṇikatevāsīnā Gomitakena katā

この銘文の書体はアショーカ王の法勅刻文の文字よりやや下るものようであり、部分的に文字が消えて判読し難い箇所もあるが、リューダースの訳から次のように読める。「その尊者なる像はマニバドラの信奉者である八兄弟によって造立された。それはクニカの弟子、ゴーミタカ（ゴーミトラカ）によって造られた。」と（cf. Lüders, 1961）⁽⁵⁾。この銘文により、「クニカの弟子、ゴーミタカの造立」という工人の名が知られ、さらにこの像が「マニバドラ」という神名を有するヤクシャであることが判明し、さらに銘文の一行目の“(bha)ga[va]to”の部分が「尊者」と訳されることから、本像がヤクシャとして崇拝されたことを物語っている。

本像は首の部分が一度落ちたのを接合した痕跡がある。顔容は摩滅ではっきりしないが、頭部はターバン頭飾をつけていた形跡があり、顔は丸顔で、眼は切れ長で、耳は耳朶が長く、コイル状の大きな耳環をつけている。両腕は欠するため、手のポーズや持物は不明である。両腕を除く首以下の胴体は比較的保存状態が良好であり、体軀は鼓腹肥満の豊かな身体付きであるが、下半身は上半身に比べるとやや細い印象を与える。下半身はドーティーで包み、薄い布からは両脚が透けて見え、左膝を曲げ、直立する。肌に密着した衣は平行線で粗く陰刻され、股間でたくし上げたドーティーの端は両脚の間に長く垂下し、褶線はジグザク状に表されている。また身体に付けた装身具を見ると、本像は首には二重の首飾りをつけており、その一方は細い紐を束ねた幅広いもので胸にV字形に密着し、背面を見るとその結び目から4本の飾紐が垂下している。また突き出た腹部の上部には平たい帯を締め、左脇腹にその帯の結

び目が見える。以上が本像の像容である。

本像は左膝を曲げ直立する威風堂々の姿で表されるが、側面はボリューム感に乏しく、正面観を意識した像であり、このことから本像が信仰対象として祀られ、崇拜されていたことが窺えよう。また、上半身と下半身のボリューム感の違いおよび人体のモデリングは、マウリヤ朝系の宮廷美術の工房の作とされるディールガンジ出土のヤクシー像(図3)とは対照的である。その肉体の稚拙な表現、モデリングは既に指摘されているが、石造の伝統が未熟な民間の工房の制作であることを改めて思わせる。また制作年代に関して、シュンガ朝初期、あるいはさらに遡らせてマウリヤ時代に帰する見解がこれまで提示されてきた。ただ、本像の着衣表現や装身具に注目すると、本像のドーティーを腰で留める太い紐や両脚の間に垂下するドーティーの端の4列のジグザク状の褶線の処理は、古代初期のシュンガ朝のパールフットの守護神ヤクシャ像、例えばヴィルダカ・ヤクシャ像⁽⁶⁾のそれとも比較され、首に垂下する二重の首飾りもパールフットのヤクシャ像の通例であることから、稚拙な体軀表現を含め、マウリヤ時代より、むしろシュンガ時代に近い造形感覚が看取されよう。

なお、このパールカム像と様式・像容が近い作例として、マトゥラーのパールカム村から4マイル離れたバローダ村から出土した像がある(マトゥラー博物館、Acc.no.C 23)⁽⁷⁾。これは上半身の部分と足および台座の部分の断片であるが、コイル状の大きな耳環、二重の首飾りの背面に垂下する4本の飾紐など、パールカム像と同様である。また大きさについては上半身の断片のみで1.27メートルもあり、完存ならば優にパールカム像を越える巨像であったであろう(高田, 1969)。この他、同様の像としてV. S. アグラワラが新たに発見したマトゥラーのヤクシャ像がある⁽¹³⁾。バローダ村出土のヤクシャ像同様腰から上の上半身部分の断片であるが、ターバン頭飾、大きな耳環、二重の首飾り、腹部に締めた帯など上記の2体のヤクシャ像と同様の像容を示す。左腕は完全に根元から欠している。しかし、右腕は部分的に残っており、腕先は欠くが、胸前に挙げていたことがわかり、恐らく後述するパトナー出土のヤクシャ像と同様に払子を持物として執っていたと思われる(Agrawala, 1984)。

(2) ヴィディシャー出土 ヤクシャ立像(ヴィディシャー考古博物館、図4~6)

本像はマディヤ・プラデーシュ州のヴィディシャー、ベースナガルから出土した像で、砂岩製の高さ3.43メートルの古代初期の現存するヤクシャ神像の中で最大の像である(図4)。本像は右手先が欠するものの、ほぼ完全な状態である。本像もパールカム像同様、鼓腹肥満の正面観の威風堂々とした姿で直立する。頭部はターバン頭飾をつけ、顔容は両眼は大きく、鼻梁もしっかりとし、分厚い唇で、耳には僅かながら斜めの陰刻線が認められ、恐らく本像の耳は尖った耳(śaṅkkaṅga)であった可能性がある(図6)。前述のパールカム像同様耳にはコイル状の大きな耳環をつけている。首には太い花飾りのある首飾りが垂下し、左肩から右脇にかけて天衣を斜めに掛け、その端が左肩から垂下する(図5)。両腕には臂釧およびビーズからなる五つの腕釧をつける。下半身にはドーティーを纏うが、太い腰紐でドーティーを留め、その腰紐の両端が両脚の間に垂下する。たくし上げたドーティーの端は両脚の間に垂下するが、パールカム像のように規則的な4列のジグザク状の襞は確認できず、その代わりにドーティーの襞のある尖った衣端が左足に掛っている。両腕は右手先が欠して不明であるが、左手には財布を持物に執っており、図像的に注目される。

前述のパールカムのヤクシャ像との表現上の大きな違いは、ドーティーの着衣の処理に見られる。パールカム像はたくし上げたドーティーの衣端が両脚の間に垂下し、規則的な4列のジグザク状の襞を形成しているが(図1)、このヴィディシャー像では見られず、ここではドーティーをたくし上げた際、衣端に襞ができるが、その端は尖り、左足に掛っている(図4)。この点に関してP. チャンドラは

同様のドーティーの処理が西デッカ地方の前期石窟のピタルコーラー第4窟の守門像に見いだされると指摘し、さらにヴィディシャー像の尖った耳に注目し、これを西デッカ地方の前期石窟のピタルコーラー石窟やコンダーネー石窟のチャイティヤ窟の守門のヤクシャ像に見られる尖った耳⁽⁹⁾と比較し、西インドの彫刻家の影響を指摘している (Chandra, 1966)。確かにドーティーの処理や耳の表現に西デッカ地方の前期石窟のヤクシャ表現との類似性がみられる。制作時期に関しチャンドラはこのヴィディシャー像をパールフットや前期石窟のピタルコーラー石窟のヤクシャ像より遅れるものとし、サーンチー第一、第三塔までは下らないとする (Chandra, 1966)。筆者も制作年代についてチャンドラが提示した年代が妥当であると考えている。

(3) パトナー出土のヤクシャ立像二体 (カルカッタ・インド博物館、図7～8)

続いて、パトナー付近で1812年にB. ハミルトンによって別々に発見された2体のヤクシャ像 (砂岩製) について見てみよう。これは2体とも現在カルカッタ・インド博物館に所蔵されている (no.P 1 (図7) / no.P 2 (図8))。前者を㉑像、後者を㉒像とする)。まず㉑像であるが、頭部を欠く像で、両手先がないものの、その他は保存状態が良好で、像高1.65 mの像である (図7)。一方㉒像は頭部は残るものの、摩滅が酷く、両腕は根元から消失し、両脚も膝部から下を欠く (図8)。像高は1.45 m。様式・図像的な考察に入る前に両像の同定についてみてみたい。

この二像はともに背面の天衣上、左肩のやや下に摩耗した簡素な刻文が残っている。両像の銘は次のように読める。

【銘文Ⅱ】 (Chanda, 1919; Majumdar, 1919)

㉑像 : ya kha sa(?)rvata naṁdi

㉒像 : bhage achacha-nī vī ka

この二像の銘文のうち、㉑像の銘の最初の部分が“yakha”と読めることから、これらの像がヤクシャと同定されている (Chanda, 1921; Majumdar, 1919)。その後これら㉑、㉒像のヤクシャ像の銘文からアグラワラは Bhagavān Akshayanīvikā と Sarvatranandi と同定し、またガンゴリーは㉑像の銘文中の「ナンディ naṁdi」から *Mahāmāyūrī* に登場するナンディヴァルダナ (Nandhivardhana) の都市を守護するヤクシャ・ナンディ (Nandi)、ヤクシャ・ヴァルダナ (Vardhana) と同定した (Agrawala, 1965; Gangoly, 1919; Misra, 1981)。このガンゴリーの説を受けるものの、クマラスワミーはもう一つの説として、同じ *Mahāmāyūrī* の守護神ヤクシャのリストにみえる Nandinagara の Nandi Yakṣa が別に言及されることから、Nandinagara の Nandi Yakṣa の可能性も同様にあるのではないかとする (Coomaraswamy, 1928-31)。以上の銘文解釈により、この二像がヤクシャであることはほぼ間違いないであろう。また銘文は、後1世紀頃の書体を示すと考えられている (Majumdar, 1937)。

次に様式的・図像的特徴に注目してみると、その像容はともに左肩から腹前にかけて斜めに天衣を掛け、その端は背面に長く垂下し、天衣の折返した布が左肩から左胸に垂下している。特にこの天衣の折返しはパールフットの浮彫の天人像にも認められる。下半身はドーティーを纏い、太い腰紐で留めている。首飾りのデザインはいずれも異なるが、首の後ろで結ぶ紐は両者ともに共通する。両像ともに両手を欠くが、㉑像については右肩に扠子が残り、本像が扠子を持物として執っていたことがわかる (図7)。さらに体躯の表現であるが、この像も(1)のパールカム像同様鼓腹肥満の姿で直立した威風堂々の姿であるが、パールカム像と比較した場合、上半身と下半身のバランスはパトナーの二像の方がより安定感が増し、身体的な均衡がとれた造形といえる。またドーティーの表現についても衣には明確な斜

めの平行線の褶線が刻まれ、衣の襞が強弱をつけ、細かく表されている。これら二像は多少の違いは認められるものの、同一の工房で制作されたものとされる。

高田修氏は両像の体躯のモデリングに関し、正面において技法の進んだものが認められ、胸や腹部のやや肥満した肉の盛上げなどにマトゥラーの仏・菩薩の造形に通じるものがあると指摘する（高田，1969）。前述のようにこの二像の銘文の書体が後1世紀頃とされるが、これまでこの2体のヤクシャ像がマウリヤ時代におかれ⁽¹⁰⁾、それ故銘文を後刻と見るのが通説であった（Majumdar, 1937）。高田氏は銘文の書体が後1世紀であることに注目し、これら二像の様式を再検討され、パールカム像やパールフットの初期インド美術の展開過程から考えると、この二像はよりさらに様式的に発展した段階にあるとし、銘文が後刻ではなく、銘文と彫刻を同時代とする。さらにインドの仏像の出現と関連づけ、その淵源をマウリヤ時代のヤクシャ神彫像に求めて説明されてきたが、そのマウリヤ時代とマトゥラーで初期の仏像の出現が後2世紀であり、特にパールカム像を仏像の先駆的な造形とし、そこから初期の仏像を導き出すにはあまりにも隔たり過ぎると考え、その間を埋めるものとしてパトナー出土の二像を想定する。この両像の想定によりインドの仏像の出現をより合理的な説明が可能であると考え、これら二像を後1世紀に置くことの妥当性を強調されている（高田，1969）。

この二像において特徴的な図像として挙げられるものとして、㊶像の執る払子がある。この払子を持つヤクシャの像例は前述のアグラワラの発見したマトゥラーのヤクシャの上半身断片の他に、ヤクシャではないが、ディーダルガンジ出土のヤクシー像（図3）も持物に払子を執る。持物の払子については高田修氏は単独像であるなしを問わず、古くはヤクシャ、ヤクシーなど下級神を特徴づけるものであったとする（高田，1969）。払子は単に払ともいい、また払塵ともいい、本来虫や蚊を追い払ったり、塵を払うためのものであった（岡崎，1982）。古代インド美術においても払子を持つ者は、高貴な人に仕える侍者や侍女に見られ、また仏三尊像の脇侍像に頻繁に見られる。

しかし、パトナーの㊶像やディーダルガンジ出土のヤクシー像はその正面性から何らかの尊像の侍者であったとは考え難く、単独の神像であったと考えられる。パトナーの㊶像やディーダルガンジ像が持物に執る払子は単独神像としてどのような象徴性を帯びるのだろうか。前述のように払子は実用的には蠅や塵を払うために使用されたが、またこれは実用的な意を離れ、邪魔悪障を払う功德をたたえたものとなり（蔵田，1967）、また密教では柄に白毛をつけた白払は煩惱を払う意に転用されるという（佐和，1975）。また千手観音菩薩の千手の持物には白払があり、四十手法を説く、8世紀中頃の不空訳『千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼』では白拂手は一切悪障難を除滅するとしている（大正蔵第20巻）。従って、パトナー出土の㊶像やディーダルガンジ出土のヤクシー像が執る払子においても、これらが単独神像として祀られ、種々の祈願の対象であったことから、払子は人々の息災を叶える象徴物（持物）であったことが上記の払子の象徴性や千手観音菩薩の白払手の功德から推察される。それは財布が象徴する経済的な繁栄とともに民間信仰のヤクシャ像の根本的な職能の一つと言えるであろう。

（4）パワーヤー出土 ヤクシャ立像（グワーリアル考古博物館、図9～10）

本像はマディヤ・プラデーシュ州グワーリアル南のパワーヤーから出土した像で、M. B. ガルデによって発掘された⁽¹¹⁾。このパワーヤーは3～4世紀に有力であったナーガ族の都の一つであったパドマーヴァティー（Padmāvati）にあたとされる（Garde, 1915-16）。本像は頭部、両手先を欠くが、その他は台座を含め、完存する（図9・10）。総高は台座を含め1.65 m（像高1.45 m）のほぼ等身像である。本像は台座に6行にわたりブラーフミー文字で銘が刻される（図10）。銘文は次の通りである。

【銘文 Ⅲ】（cf. Garde, 1915-16）

1. [Rā] jñāḥ svā[mi] Śīva[na]m̐disya sam̐va[tsa]re caturth[e] gr[i]ṣma-pakṣ[e] dvitiye 2
d[i]vas[e]
2. dv[ā]da[śe] 10 2 etasya pūrvāy[e] gauṣṭhyā Māṇibhadra-bhaktā garbhasukhitāḥ bhagavato
3. Māṇ[i]bhadrasya pratimā pratiṣṭhāpayaṃti gauṣṭhyam bhagavā āyu balaṃ vācaṃ
kaly[ā]ṇabhyu-
4. dayam̐ ca prito diśatu [b]rāhma[ṇa]sya gotamasya kra[mā]rasya brāhmaṇasya
rudradāsasya śiva[ttra]dāye
5. śamabhūt[i]sya j[i]vasya kham̐[jabala]sya śiva[ne]mis[y]a śivabha[dra]sya [ku]makasya
dhanade-
6. vasya dā.

本像は銘文中の2および3行目に“Māṇibhadra”という語があることから、本像がパールカム像同様、マニバドラ・ヤクシャと同定される。銘文の内容に関してはマニバドラ・ヤクシャの信仰と関わるため、ここでは詳述せず、「3. マニバドラ・ヤクシャについて—銘文・文献資料を中心に—」の節で考察する。まず、本像の像容、図像的な特徴についてみてみよう。

本像は前述のように頭部、両手先を欠く。本像もこれまで考察したヤクシャ像同様、鼓腹肥満の豊かな肉付きの威風堂々とした姿で直立する(図9)。像容は首から連珠の太い首飾りを下げ、その飾りは背面で結び、飾紐が背面に垂下している。このような首飾りの処理はパールカム像以来みられるものである。両腕には蛇が巻き付いたような形の臂釧、花文や蔓草の装飾帯の間に宝石を嵌め込んだ腕釧をはめ、右手先が消失するが、右手は恐らく胸前に挙げていたと思われる。一方左手には財布を執り、左肩にはボリューム感のある天衣が巻き付き、その端は左手をまわり、後ろに垂下している。また本像は腹部を斜めにわたって菩薩や梵天に見られる聖紐を掛けている。下半身にはドーティーを巻き、そのドーティーは身体に密着したように表される。以上が本像の像容であるが、特に左手の持物の財布はヤクシャの財宝を司る職能を示し、恐らく同じ尊名を持つパールカム像も恐らく左手に財布を持っていたと考えられる。また“maṇibhadra”の“maṇi”が「宝石」であることから持物の財布はその象徴と解釈できよう。

パワーヤー像の制作年代であるが、銘文のブラフミー文字が後1～2世紀の書体であることから、M. B. ガルデはこの像を後1～2世紀の制作とした(Garde, 1915-16)。パワーヤー像の様式的特徴を検討してみると、まず上半身であるが、胸部と腹部の間に細い管状の肉身を胸部の緩みに合わせ表す鼓腹の表現はクシャーン朝のヤクシャ像、例えばアヒチャトラー出土の鉢を支えるヤクシャ像⁽¹²⁾の腹部表現に共通し、また左手首に掛る天衣の表現はラクナウ州立博物館所蔵のカンカーリー・ティーラー出土の菩薩像⁽¹³⁾、さらに天衣のボリューム感についてもマトゥラー博物館所蔵のマトゥラー出土の「帝釈窟説法」図中のインドラの天衣⁽¹⁴⁾の表現と類似する。一方下半身の表現も、ドーティーが肌に密着して透き通るような表現などクシャーン朝の仏・菩薩像に典型的に見られるものであり、その体軀の全体のモデリングもクシャーン朝の仏・菩薩の造形に通じるものがある。よって、様式的にもこの像は銘文と同じ後1～2世紀の年代が与えられることには異論はなく、恐らくこの像はマトゥラーの初期の仏・菩薩像とほぼ同時期かそれよりやや遅れた時期に制作されたことが推察される。

上記の(3)パトナー出土の二体、(4)パワーヤー像の作例がクシャーン朝の仏像の出現とパラレルな関係にあったことは仏像の中心地であったマトゥラーでは単独の神像彫刻の伝統が仏像へと移行していき、一方パトナーやパワーヤーといったマトゥラー以外の地域ではヤクシャ像の伝統が依然根強く残っていることが推察されるであろう。

以上前1世紀～後1乃至2世紀（クシャーン朝）における古代初期のヤクシャの丸彫神像の作例⁽¹⁵⁾を5体取り上げ、これまでの先行研究を踏まえ、その様式的・図像的な特徴を検討した。

近年発見されたマトウラーのヤクシャ立像二体について

次に近年マトウラーで発見された二体のヤクシャ像を取り上げ、ここでは主に図像に注目してみたい。特にここで紹介するマトウラーの二体のヤクシャ像では、これまでの5体のヤクシャ像とは異なる図像的な要素を有する点興味深い。この二体のヤクシャ像はそれぞれ1987年にマトウラー郊外のパラナー・カラーン村から出土した丸彫の神像であり、現在マトウラー博物館に所蔵されている。両像は様式的・形式的にも、(1)パールカム像の像容と類似することから、同時期の制作と考えられる（肥塚・宮治，2000）。

㉑ ヤクシャ立像（マトウラー博物館所蔵、Acc.no.87.145/ 図11）

㉒ ヤクシャ（？）立像（マトウラー博物館所蔵、Acc.no.87.146/ 図13～14）

㉑像は左手の持物以外はほぼ完璧に残っており、像高1.70 mのほぼ等身大の像である。この像は台座に3行に及ぶ銘文⁽¹⁶⁾が残っているが、(1)パールカム像のように尊名や作者は確定できない。㉑像はターバン頭飾を被り、耳には大きなコイル状の耳環をはめ、顎を突き出して正面を向いている（図11）。頭髪は後頭部をみると細い毛筋で表されている。胸には(1)パールカム像やパールフットの守護神ヤクシャ像のように二重の首飾りを首から下げ、背面でそれを留め、二本の紐飾が垂下している（図11背面）。腕には臂釧・腕釧をはめ、そして、左肩から背面に斜めに天衣を掛け、その衣端が両腕に掛っている。腰にはこれまで見たヤクシャ像同様ドーティーを巻き、太い紐（帯）で締め、ドーティーをたくし上げた衣端が両脚の間に下がり、これも(1)パールカム像やパールフットのヤクシャ像のように4列のジグザク状の襷になっている。以上が㉑像の像容である。基本的に(1)パールカム像に近い像容であることがわかる。

像容を確認した上で、両手の持物に注目したい。両腕のうち右手は胸前におき、棍棒のような太い剣（槌）の柄を握んでいる（図11）。その剣は上部が消失しているが、剣あるいは槌（mudgara）であることは間違いない。この剣を持物に執ることからこの像はmudgara-pāṇiと呼ばれている（Sharma, 1994）。一方左手は、指を内側に丸め、掌を上方に向ける形であり、恐らく何か持物を執っていたものと思われる。

㉑像の持物を復元し得る作例がシュンガ朝のヤクシャの浮彫に見いだされる（図12、マトウラー博物館、acc.no. I.18.4）。それは上半身のみ断片のヤクシャ像（像高38 cm）であるが、㉑像同様にターバン頭飾、二重の首飾り、両腕に天衣を掛ける同様の像容であり、右手に剣あるいは棍棒の柄を握り、左手には台座に乗った合掌する立像の人物を執る。恐らくこの像は子供と考えられる。㉑像も左手の向きおよび左肩の剥落部から、恐らく子供の像を手を執っていたと推測できよう（Kumar, 2002）。ただこの浮彫の像に関し人物が剣を持ち、左手持物の人物が合掌していることから、これをスタソーマ本生図との関連が指摘されるが（Sharma, 1994）、この㉑像のヤクシャ像の持物が浮彫像と比較され、またその浮彫が上半身の断片であるが、像高が40センチ弱であることから、全体で70～80 cm位の高さと推測できるため、何かの尊像を意図したものと見做され、この浮彫とスタソーマ本生との関連性は薄いであろう。やはり、㉑像に見られるようにヤクシャ像とする方が妥当と思われる。

この㉑像にみられる剣の柄を持つYakṣa Mudgara-pāṇi (Moggara-pāṇi) は初期のジャイナ教文献である*The Antagada Dasāo*に記され、その名が示す通り棍棒（あるいは剣）を持つ姿の像としてラー

ジャグリハ (Rājagrha) の庭師アジュナエ (Ajjūṇae) のヤクシャの聖廟 (jakkhāyayaṇa) に祀られ、先祖代々、庭師アジュナエの家系の守護神であった (Coomaraswamy, 1928-31)。まさに持物の棍棒 (あるいは剣) は一族安泰の守護神に相応しく、㊶像の持物の剣も守護神としての性格を示すものと言えよう。また図12の浮彫像から導き出した左手の持物としての子供の像についても、例えば、釈迦族には新たに誕生した子供を部族神ヤクシャ (Śakyavardhana) の像の前に差し出し、礼拝するという慣習があり (Coomaraswamy, 1928-31)、子供はまさに家督の象徴であった。このことから、合掌する子供の像は一族の繁栄を願うものと言え、これも守護神としてのヤクシャの本来の性格を示している。㊶像の出土状況が不明であるが、両手の持物からも、守護神であったに違いない。

次に㊷像 (図13・14) であるが、これも㊶像同様、台座に銘文が残る⁽¹⁷⁾。本像は両腕が消失し、右手は肘より下、左手は肩から消失し、僅かながら、左手は腰の所に置き、腕に掛る天衣と腕釧の一部が確認できる (図13)。両腕以外は保存状態も良好で、首には三道が刻まれ、頭部にターバン頭飾、耳には㊶像同様の耳環、首からは二重の首飾りを下げ、これも㊶像と同様である。しかし、天衣の掛け方は異なり、㊷像では下半身に斜めに掛り、両腕に掛っている (図13)。またドーティーをたくし上げた衣端の処理も㊶像と酷似している。以上が㊷像の像容である。ここで特に注目したいのが、後頭部の表現である (図14)。本像は頭部に大きなターバンを巻くが、さらに後頭部には水滴状の飾りが後頭部を覆うように表されている。その飾りには陰刻線が刻まれ、あたかも火焰のような形態を示す。この点に関し、R. C. シャルマは銘文の一部に「アグニ」と読み取れる箇所があり、これをアグニ (火天) の像と考えている (Sharma, 1995)。そうするとアグニ像の単独像として極めて早い作例と言える。

インドラをはじめヴェーダのアーリヤ神の具現化の問題について、入澤崇氏は「バラモン教は礼拝対象としての性格が希薄で、アーリヤ神は本来礼拝対象となる機能を欠いていた。ヤクシャ・ヤクシーといった鬼神の像がアーリヤ起源の神々に先行して出現した事実がそのことを明瞭に物語っている。観念的な存在のアーリヤ神が具体的な礼拝対象となるには鬼神というフィルターを通過する必要がある。」と指摘している (入澤, 1985)。この㊶、㊷像を比較した場合、持物や㊷像の後頭部の火焰のモチーフ以外は㊷像は㊶像のヤクシャ像の像容と酷似し、その造形はヤクシャ像を基本としている。ここでアグニとヤクシャの関連を探ってみると、『リグ・ヴェーダ』X.88.13においてアグニはヤクシャの支配者として言及される⁽¹⁸⁾。このような関係性からも、入澤氏が指摘するようにアーリヤ神であるアグニの像が鬼神ヤクシャを媒介として具体的な姿を現してもなんら不思議はないであろう。後世のヒンドゥー美術のアグニ神⁽¹⁹⁾が鼓腹肥満の姿を取ることこの時代のヤクシャ像の関係を想起するものと言えよう。

また㊶、㊷の両像が同じ出土地、さらに像容、大きさも酷似する点は両像が一对で配置された可能性も指摘されている (定金, 1999)。ただ、出土状況が不明な現段階では、両像が同一工房で制作されたことは様式、像容の点からみてまず間違いなく、設置の状況については推測の域を出ない。

以上、近年マトゥラーで発見された二体の神像彫刻について、主に図像、同定を中心に考察を進めたが、この両像の発見によって、古代初期のヤクシャの丸彫神像の新たな側面が見いだされたと言えよう。

マニバドラ・ヤクシャについて—銘文・文献資料を中心に—

次に上記の1.(1) パールカム像、(4) パワーヤー像で見られた「マニバドラ・ヤクシャ」について銘文・文献資料を手掛かりに、古代初期のヤクシャ像の信仰の様相を考えてみたい。前述の(1)パールカム像の銘文 (図2) にはヤクシャの尊名および作者が記されるが、その他信仰の様相を窺い知る記

述は見いだされない【銘文Ⅰ】。一方、(4)パワーヤー像の銘文には彫刻の作者は記されないが、ヤクシャの尊名とともに、そのヤクシャを信奉した人物や祈願の対象が明記され、ヤクシャ信仰を知る上で貴重な銘文資料となる(図10・【銘文Ⅲ】)。

銘文の内容に入る前に、まず「マニバドラ・ヤクシャ」についてみてみたい。この「マニバドラ・ヤクシャ」はヤクシャのパンテオンおよび信仰において、ヤクシャの大將クベーラに次ぐ地位を獲得している。彼は様々な名前、Maṇivara, Maṇicara, Maṇimat で呼ばれ、その一方でマニバドラはクベーラ(Kubera-Vaiśravaṇa)と多くの異名を共有する。すなわち、Yakṣarāja, Yakṣendra, Nidhipati, Dhanapati, Dhanādhipati, Dhanādyakṣaである。この異名が示すようにマニバドラもクベーラ同様、財宝・富の主であることが窺える。ヤクシャの主としてのマニバドラは特にジャイナ教において堅固の地位を確立しており、マニバドラとしばしば対となるプールナバドラ(Pūrṇabhadra)とともに半神半人の主である二人のインドラ(Indra)となっている(Misra, 1981)。

また叙事詩にもマニバドラは登場し、『マハーバーラタ』ではクベーラの集会場に集う諸々のヤクシャの一人として、またはクベーラの指揮官として様々な姿をとり、武装した諸々の従者のヤクシャに囲まれる姿(Mbh.II.10.14; III. 158.51-54)や、またマニバドラは『ナラ王物語』において商人、旅人の守護神として旅の安全が祈願されている(Mbh.III.62.123)。このようにマニバドラはクベーラの主たる従者であり、財宝の主、隊商の守護神としてクベーラと職能を共有している。特に財宝の主であることは造形面からも窺え、パワーヤーのマニバドラ・ヤクシャ像は持物に財布を執っている(図9)。また隊商すなわち商人(ギルド)の守護者としての性格は後述する銘文との内容とも関連する。

マニバドラ・ヤクシャの信仰の地域であるが、(1)、(4)でみたように現存作例ではマトウラーのパールカム、中インドのパワーヤー出土の実際の像が知られる。一方文献資料が伝えるマニバドラの信仰の実態についてみると、まず仏典の*Sumyutta Nikāya* (I.208)では、マガダ国にマニバドラのチャイティヤ(霊廟あるいは祠堂)があり、Maṇimālaと呼ばれ、漢訳では「摩尼跋陀天祠」とあり、恒河辺にあり、子宝を祈願されたとある⁽²⁰⁾。また都市・地方の守護神ヤクシャを列挙する*Mahāmāyūrī*、『仏母大孔雀明王経』ではその弟とされるプールナバドラとともにBrahmāvati (VarṇuあるいはGandharaのある都市に比定)の守護神である(Misra, 1981)。ジャイナ教の*Vipāka Sūtra*によれば、マニバドラの霊廟がMithilāのVaddhamānapuraのVijayavaddhamānaという園林にあったとされる⁽²¹⁾。上記の考古学的な出土品並びに文献資料から、マニバドラ・ヤクシャの信仰は北、中、東、北西インドといった広範囲に及んでいたことがわかり、文献資料からは他の地域に比べ、東インドでその信仰が流布していたことが窺える(Misra, 1981)。

以上、文献資料を中心にマニバドラ・ヤクシャの性格および信仰の範囲を探った。ここでパワーヤー像の銘文に立ち返り、具体的な信仰の様相をみてみたい。ここで【銘文Ⅲ】をみてみると、その内容は次のように読める。

「王にして主(svā[mi])なるシヴァナンディ(Śiva[na]ṁdi)の紀元の第四年、夏分第2月の12日、この日に、ギルドなるマニバドラに誠信を捧げる人たち(Maṇibhadra-bhaktā)、胎児を得たことを喜べる人々が、尊き(bhagavato)マニバドラの像を造立した。ギルドに対し、その尊者は長寿、力、弁舌、幸福、繁栄を与えんことを。バラモンなるgotama、kramāra、バラモンなるRudradāa、Śivatradāya、Śamabhūti、Jiva、Khamjabala、Śivanemi、Śivabhadra、Kumaka、Dhanadevaの寄進。」と(杉本, 1983)。

この銘文から、マニバドラ・ヤクシャがギルド(マニバドラを信奉する人々、子宝を得た人々)によって造立され、寄進者に長寿、力、弁舌、幸福、繁栄が成就するよう祈願され、種々の祈願の対象とされ

たことがわかる。さらに寄進者に名を連ねている人々がバラモンをはじめ、シヴァ神を信奉する人々によってこのヤクシャが信仰されていたことが窺える（杉本，1983）。このマニバドラを信奉する人々（Māṇibhadra-bhaktā）に関し、パーリ仏典においても言及があり、*Mahāniddeśa* (I.89) では民間信仰の神々の信奉者をvattika (=Skt, vratika, 戒を守る者)として列挙し、その中にMaṇibhaddavattikaが見え、また『ミリンダ王の問い (*Millindapañho*)』においても同様のリストが挙げられ、マニバドラの信奉者をMaṇibhaddāとして挙げられ、その信奉者のグループは前者が苦行者や隠遁者の階級、後者が曲芸師、ジャグラー、俳優などが含まれている⁽²²⁾。以上のような銘文、文献資料によりマニバドラ・ヤクシャを信仰する階層がバラモンはじめ、民衆レベルまで幅広い支持を受けていたことがわかる。そのことは銘文にみる祈願の対象をみても明らかであろう。

以上の実作例の銘文並びに文献資料から、マニバドラ・ヤクシャの信仰の様相を観察した。まさに古代初期のヤクシャ像の造形にみる鼓腹肥満の体軀、威風堂々の姿、および持物の財布や剣はいずれもとって銘文にみる寄進者、ヤクシャの信奉者の祈願に見合った造形が具現化されていると言えるであろう。

おわりに

古代初期美術にみられるヤクシャの丸彫神像について具体例を挙げながら、考察してきた。本稿では従来の先行研究で議論されてきた古代のヤクシャの丸彫神像5例をまず取り上げ、様式・図像を整理した。

ここで(2) ヴィディシャー像、(4) パワーヤー像にみられた持物の財布についてはこれまで指摘されているようにヤクシャの財布・富の主の性格を示すものである。一方、(3) のパトナー出土の㉔像やディーダルガンジ出土のヤクシー像の執る払子については高田氏によりヤクシャ・ヤクシーなどの下級神に特有の持物とされるが、この払子が古代において本尊クラスの神像が持物とすることから、払子そのものが何らかの神格の特性を表すものと考えられ、後代の千手観音菩薩の四十手法の中に「白払手」がみられ、その功德が一切悪障難の除滅であり、払子の本来的な機能が虫や塵を払うことにあることから、払子は古来人々の悪障難を払う機能を持った持物であることが推測できよう。

またバラナー・カラーン出土のヤクシャ像の右手の持物である剣や浮彫との比較から特定された左の持物の子供の像は、ヤクシャの守護神、特に家系の守護神を反映したものと分かり、パワーヤー像の銘文が示す如く古代のヤクシャ像が種々の祈願の対象であったことが持物から推測できる。さらにバラナー・カラーン出土の㉕像の後頭部の火焰を模した飾りは、アグニ神像を意図したものと考えられ、アーリヤ神の造形がヤクシャ・ヤクシーという鬼神の造形を媒介に成立したことを示すものであり、またインドのマトゥラー仏の出現に関しても古代初期のヤクシャ神像との関連が指摘されており、インドの尊像彫刻の発生を考える上でも極めて重要である。

そして、後半部で取り上げた作例の銘文中にみられた「マニバドラ・ヤクシャ」について、銘文・文献資料を手掛かりにその神格および信仰についてみたが、マニバドラはヤクシャの主であるクベーラとその職能を共有し、財布・豊饒の主であるとともに、銘文や叙事詩が記すように商人（ギルド）・旅人の守護神であり、信仰の地域もマトゥラー、中インドのパワーヤーや文献が伝える東インドといった広範囲に及び、信仰者も銘文・文献が示す通り、バラモンから民衆レベルまで様々な社会階層の人々に信仰されていたことが推察される。

古代のヤクシャ像の信仰の分布や信者層は仏教を発展・流布するための格好の媒体となったことは想像に難くなく、実際にヤクシャが初期仏教教団へ受容される様は原始経典に語られる所であるし、ま

た初期仏教美術の遺跡であるパールフット、サーンチーでは多くのヤクシャ像が守護神、ストゥーパの塔門の守門像へと取り込まれ、さらには仏像のモデルともなっていく。これ以後、仏教美術は盛んにヤクシャの造形を取り入れ、発展していき、まさにヤクシャ・ヤクシーといった民間信仰の神々（いわゆる鬼神）の信仰および信仰形態が仏教美術の基層を形成していったのである。

〔註〕

- (1) ヤクシャの聖廟である caitya, āyatana については A・K・クマーラスワミー、R・N・ミスラ両氏の研究に詳しい。cf. Coomaraswamy, A. K. (1928-31), *Yakṣas*, Washington, (New Delhi/ reprint2001), part I, 17-24. Misra, R. N. (1981), *Yaksha Cult and Iconography*, Delhi, pp.88-97. また造形美術においてもヤクシャの聖廟を表したのも知られる。それは南インド、アーンドラ美術にみられる。仏伝の釈迦が誕生後、摩耶夫人が赤子の太子をシャーキャ族の部族神であるヤクシャの所へ連れていく「ヤクシャ廟の参詣」においても、ヤクシャのチャイティヤは聖樹下の聖壇で表されている。cf. Knox, R. (1992), *Amaravati Buddhist Sculpture from the Great Stūpa*, London: British Museum, cat. 61.
- (2) 例えば、サーンチー第一塔北門第二横梁背面「降魔成道」図。肥塚隆・宮治昭編（2000）『世界美術大全集 東洋編 13 インド（1）』小学館、挿図 54.
- (3) Coomaraswamy, A. K. (1965) *History of Indian and Indonesia Art*, The Dover Pub. (first published 1927), 16-17, 229-230, fig.8-9, 15,17. Bachhofer, L. (1972) *Early Indian Sculpture*, New York/reprint (first published 1929), vol.I, 8-12, pl.9-11. Agrawala, V. S. (1984) *Pre-Kushana Art of Mathurā*, Varanashi/reprint, (first published 1933), 7-18.
- (4) 本考察ではヤクシャ（男性神）像を中心に取り上げ、古代インドのディーダルガンジーやヴィディシャー出土のヤクシー（女性神）像については次の論文を参照されたい。Spooner, D. B. (1919) The Didarganj Image now in Patna museum, *Journal of Bihar and Orissa Research Society*, 107-118. (筆者未見), Rowland, B. (1953) *The Art and Architecture of India*, (Pelican History of Art Series), 1st ed., Harmondworth, 58, 259 (n.19). Schlumberger, D. (trans. by Madam Schlumberger). (1988) The Didarganji Chauri-Bearer A View Point, *Lalit Kalā*, 23, 9-11., Khandalavala, K. (1988) The Didarganji Chauri-Bearer Another View Point, *Lalit Kalā*, 23, 12-14., Chandra, P. (1966) Yaksha and Yakshī Images from Vidiśā, *Ars Orientalis*, 6, 157-163. 高田修(1969), 124-130.
- (5) この銘文の解読にあたり、ジャヤスワル氏は銘文に見られる「クニカ kuṇika」からマガダ国の王「アジャータシャトル Ajātaśatru」と見做し、この像を前618年とし、マガダの一王の肖像を表したものとしたが、チャンドラ氏が銘文、図像の問題を検討し、ヤクシャと同定し、さらに N. G. マジュンダル氏はマニバドラと同定した。Misra, R. N. (1981) 83.
- (6) 肥塚隆・宮治昭編（2000）、図版 19 参照。
- (7) cf. Agrawala, V. S. (1984), fig. 9; Vogel, J. Ph. (1930) *La Sculpture de Mathurā*, *Ars Asiatica*, 15, Paris and Brussels: Éditions G. Van Oest, pl. XLIII.
- (8) cf. Agrawala, V. S. (1984), fig.1-3.
- (9) cf. Dehejia, V. (1972) *Early Buddhist Rock Temples*, London: Thames&Hudson, pl.20, 33.
- (10) Coomaraswamy, A. K. (1965) 16-17; Rowland, B. (1953) p8 ; Bachhofer, L. (1972) 9, pl.10.
- (11) Garde, M. B. (1915-16) The Site of Padmāvati, *Archaeological Survey of India, Annual Report 1915-16*, 105-106.
- (12) 肥塚隆・宮治昭編（2000）図版 97 参照。
- (13) cf. Mitterwallner, G. v. (1989) Yakṣas of Ancient Mathurā, in Srinivasan, D. M. (ed.) *Mathura The Cultural Heritage*, New Delhi, pl.35. VI.
- (14) 肥塚隆・宮治昭編（2000）図版 63 参照。
- (15) この他、この時期のヤクシャの丸彫神像としてはアラハバード博物館所蔵の倚坐像のヤクシャ像（持物に豚?を執る。cf. Misra, R. N. (1981), fig.38）、またマトゥラー博物館所蔵の飾りのある杖（槍）を持つ男性像（Acc.no. E 7、像高1.09 m, cf. Sharma, R. C. (1994) *The Splendour of Mathurā Art and Museum*, New Delhi: National Museum/Institute, fig.14.）も耳環の形、首飾りおよび天衣の形式からヤクシャである可能性が高い。R. C. シャルマはこの像をシュンガ時代とするが、様式、造形形式からみてクシャーン朝の制作とみられる。

- (16) 銘文は次の通りである。
 1. amatyena prati (hāra) (e) (na)
 2.(jaya gh (o) (s) (ena)(to) pra
 3. (bh) (āga) (v) (a) to ā (gn) isa prā (t)i (m) (ā)
 cf. Sharma, R. C. (1994), 76, note 10.
- (17) 銘文は次の通りである。
 (kā) ritā p (ri) yantām (a)ga(ya). cf. Sharma, R. C. (1994), 76. note 11.
- (18) vaiśvānaram kavayo yājñiyāso gñim devā ajanayannajuryam | nakṣatram pratnamaminaccariṣṇu yakṣa syādhyakṣam taviṣam vṛhantaṁ | (X.88.13), Bandhu, V. (ed.) (1965) *Ṛgveda with Commentaries*, Part.VII (Maṇḍala X,46-191) [Vishveshvaranand Indological Series-25], Hoshiarpur, X.88.13. また、ヤクシャはクペーラの支配下に入る前にアグニ、続いてインドラまたはスカンダの支配下にあったとされ、ヤクシャがクペーラの支配下に置かれるのはヴェーダ文献の後期の *Gṛhya Sūtras* においてである。Misra, R. N. (1981), 16,19.
- (19) 立川武蔵他 (1980) 『ヒンドウの神々』 せりか書房、図 4、5 参照。
- (20) 『撰集百縁経』 卷第十、恒伽達縁 (大正蔵第 4 卷、254 頁上～中) 『賢愚経』 卷第一、恒伽達品第六 (大正蔵第 4 卷、355 頁上～中)、赤沼智善 (1967) 『印度佛教固有名詞辞典』 法蔵館、408-409. Mañibhadda¹ (夜叉) 摩尼跋陀の項参照。
- (21) *Sūrya Prajñapti* では、Mithilā の北東にマニバドラのチャイティヤがあったとする。Misra, R. N. (1981) 81.
- (22) Vallée Poussin, L. de. La and Thomas, E. J. (ed.) (1978) *Mahaniddesa*, (The Pali Text Society, no.76), London, part I, p.89., Trenckner, V. (ed.) (1962) *The Milindapañho* (The Pali Text Society), London, 191. 中村元・早島鏡正 (1964) 『ミリンダ王の問い (2)』 (東洋文庫 15)、平凡社、p.186. Agrawala, V. S. (1970) *Ancient Indian Folk Cults*, Varanasi, pp.10-11.; Misra, R. N. (1981) 81. footnote 2.

引用文献一覧

- Agrawala, V. S. (1965) *Studies in Indian Art*, Varanasi.
- Agrawala, V. S. (1970) *Ancient Indian Folk Cults*, Varanasi.
- Agrawala, V. S. (1984) *Pre-Kushāna Art of Mathurā*, Varanashi/ reprint, (first published 1933), 7-18.
- Bandhu, V. (ed.) (1965) *Ṛgveda with Commentaries*, Part. VII (Maṇḍala X, 46-191) [Vishveshvaranand Indological Series-25], Hoshiarpur.
- Bachhofer, L. (1972) *Early Indian Sculpture*, New York/reprint (first published 1929), vol.I.
- Chanda, R. P. (1919) Inscription on two Patna Statues, *Indian Antiquary*, **48**, 25-28.
- Chanda, R. P. (1921) Four Ancient Yakṣa Statues, *Journal of the Department of Letters*, University of Calcutta, **4**, 47-84. [筆者未見]
- Chandra, P. (1966) Yaksha and Yakshī Images from Vidiśā, *Ars Orientalis*, **6**, 157-163.
- Coomaraswamy, A. K. (1928-31), *Yakṣas*, (Washington, New Delhi/ reprint 2001), part I & part II.
- Coomaraswamy, A. K. (1965) *History of Indian and Indonesia Art*, The Dover Pub. (first published 1927).
- Dehejia, V. (1972) *Early Buddhist Rock Temples*, London: Thames&Hudson.
- Gangoly, O. C. (1919) *Modern Review*, 419-424
- Garde, M. B. (1915-16) The Site of Padmāvati, *Archaeological Survey of India, Annual Report 1915-16*, 101-109.
- Khandalavala, K. (1988) The Didarganji Chauri-Bearer Another View Point, *Lalit Kalā*, **23**, 12-14.
- Knox, R. (1992), *Amaravati Buddhist Sculpture from the Great Stūpa*, London: British Museum.
- Mitterwallner, G. v. (1989) Yakṣas of Ancient Mathurā, in Srinivasan, D. M. (ed.) *Mathura The Cultural Heritage*, New Delhi, 368-382.
- Kumar, J. (2002) *Masterpieces of Mathurā Museum*, New Delhi.
- Lüders, H. (1961). *Mathurā Inscriptions*, Göttingen.
- Majumdar, N. G. (1937) *A Guide to the Sculptures in the Indian Museum*, part I, Delhi (reprint 1987), 6-7.
- Majumdar, R. C. (1919) Alleged Śāisunaga Statues, *Indian Antiquary*, **48**, 29-36.
- Misra, R. N. (1981), *Yaksha Cult and Iconography*, Delhi.
- Rowland, B. (1953) *The Art and Architecture of India*, (Pelican History of Art Series), 1st ed., Harmondworth.

- Schlumberger, D. (trans. by Madam Schlumberger). (1988) The Didarganji Chauri-Bearer A View Point, *Lalit Kalā*, **23**, 9-11.
- Sharma, R. C. (1994) *The Splendour of Mathurā Art and Museum*, New Delhi: National Museum/Institute.
- Sharma, R. C. (1995) *Buddhist Art Mathura School*, New Delhi et al: Wiley Eastern Limited.
- Spooner, D. B. (1919) The Didarganj Image now in Patna museum, *Journal of Bihar and Orissa Research Society*, 107-118. [筆者未見]
- Trenckner, V. (ed.) (1962) *The Milindapañho* (The Pali Text Society), London.
- Vallée Poussin, L. de. La and Thomas, E. J. (ed.) (1978) *Mahaniddesa*, (The Pali Text Society, no.76), London.
- Vogel, J. Ph. (1930) *La Sculpture de Mathurā*, *Ars Asiatica*, **15**, Paris and Brussels: Éditions G. Van Oest.

[和書]

- 赤沼智善 (1967) 『印度佛教固有名詞辞典』法蔵館.
- 入澤崇 (1985) 「アシヨーカ王柱と旗柱」『佛教藝術』**163**, 85-110.
- 岡崎讓治監修 (1982) 『仏具大事典』鎌倉新書.
- 蔵田蔵編 (1967) 『仏具』(日本の美術 **16**) 至文堂.
- 肥塚隆・宮治昭編 (2000年) 『世界美術大全集 東洋編 13 インド (1)』小学館.
- 定金計次 (1999) 「15. ポスト・マウリヤ時代の彫刻と仏教美術の成立」(畠中光亨編『アジア美術史』京都造形芸術大学、所収).
- 佐和隆研編 (1975) 『密教辞典 全一卷』法蔵館.
- 杉本卓洲 (1983) 「Yakṣa と菩薩—Mathurāの仏教をめぐって—」『金沢大学 文学部論集 行動科学科篇』**3**, 79～108.
- 高田修 (1969) 「マウリヤ時代の神像彫刻」(『佛教美術史論考』中央公論美術出版社、所収) 120～137.
- 立川武蔵他 (1980) 『ヒンドウの神々』せりか書房.
- 中村元・早島鏡正 (1964) 『ミリングダ王の問い (2)』(東洋文庫 **15**)、平凡社.

[漢訳経典]

- 『賢愚経』卷第一、恒伽達品第六 (大正蔵第4卷)
- 『撰集百縁経』卷第十、恒伽達縁 (大正蔵第4卷)
- 『千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼』(大正蔵第20卷)

[図版出典]

本稿で使用した図版について図3は肥塚隆・宮治昭編 (2000年) 『世界美術大全集 東洋編 13 インド (1)』小学館、図版9・10からの複写である。その他は全て筆者自身の撮影によるものである。

[付記]

本稿作成にあたり、名古屋大学大学院文学研究科宮治昭教授に御指導を賜り、有意義な御意見をいただきました。末筆ながら、記して厚く御礼申し上げます。



図1 マニバドラー・ヤクシャ立像 パールカム、マトウラー出土
マトウラー博物館



図3 ヤクシー立像 デイターダールガンジ出土、パトナー博物館



図2 マニバドラー・ヤクシャ立像の銘文



図4 ヤクシャ立像 ヴィディシャー出土
ヴィディシャー考古博物館



図5 図4部分:背面



図6 図4部分:頭部



図7 ヤクシヤ立像(no.P 1)
バトナー出土、
カルカッタ・インド博物館



図9 マニバドドラ・ヤクシヤ立像
パワーヤー出土、
グワリーリアル考古博物館



図8 ヤクシヤ立像(no.P 2)
バトナー出土、
カルカッタ・インド博物館



図10 図9 部分:台座銘文



図11 ヤクシャ立像 バラナー・カラン、マトゥラー出土、マトゥラー博物館



図12 ヤクシャ像浮彫 シュンガ時代 マトゥラー博物館



図13 ヤクシャ(アグニ?)立像 パラナー・カラーン、マトゥラー出土、マトゥラー博物館



図14 図13部分:後頭部(火焰)